
CQ ham radio 2023 年 7 月号 連載「Let's enjoy Ham life」(筆者: JI1BTL 水田かおり)
「アクティブ・ハム紹介 JP3EVM 植木 等さん」インタビュー全文

2023 年 4 月 22 日に栃木県那須烏山市三箇の県民休養公園で開催された「第 26 回下野の国 ARDF 競技大会」の会場に於いて、CQ ham radio 誌の連載「ARDF NEWS」を執筆いただいている JP3EVM 植木 等さんに JI1BTL 水田かおりさんがインタビュー取材を行ったときの内容全文を公開いたします。

以下、聞き手 (Q) は JI1BTL 水田さん、話し手 (A) は JP3EVM 植木さんです。

【Q1】アマチュア無線を始めたきっかけは？

【A1】 学研の「科学」を愛読していた普通の科学少年だったと思います。アマチュア無線のことは知っていましたが、身近な人物にアマチュア無線家がいなかったので関わることはありませんでした。それでも、NHK 総合テレビ番組『受信相談』は興味深く見ていました。よく覚えているのが 1 本のマストに 2 つのアンテナを取り付ける場合は一定の間隔を空けなければならないというもの。やがて電波を学んでいって、その距離が $1/2\lambda$ ということがわかったのですが、そのせいか車に $1/2\lambda$ 内に色々なアンテナを取り付けているのを見ると心配になります。

中学校では空き教室を 2 つに区切って、一方が私の属する美術部、他方が科学部の部室でしたがどちらも顧問が指導しない放置クラブでしたので一緒に遊んでいました。古い校内放送のアンプの出力端子に部室内にループ状に張った電線を取付け、それにループにした針金を付けたスピーカーを近付けて「聞こえる～」などと、今思えばスプリアスが無茶苦茶出ていたのかもしれませんが田舎の学校ですので…。直接にはアマチュア無線に関わりませんでした。その精神である好奇心はたっぷりと持っていました。

社会人になってからヨットを始めて地域クラブに加入したのですが、アマチュア無線を行っていた人たちが中心になって始めたクラブでしたのでアマチュア無線を勧められたのがきっかけです。

【Q2】ARDF を始めたきっかけは？

【A2】 従免を取得し、局免申請を考え始めると購読するのが本誌。当時の本誌には毎号のように FOX テーリング競技大会の結果が報じられていました。「面白そう」と静岡県富士宮市朝霧高原で開催の第 2 回 FOX テーリング全国大会 (1988 年) にエントリー。小林電機研究所製の完成基板を入手し大阪日本橋で部品を購入して受信機を組み立てて参加しました。

大会では第 1 組スタートになってしまいました。スタート走行コースの両脇には多くのカメラが並んでいるのでここは頑張らねばとダッシュ。これだけで息が上がってしまいま

した。翌月の本誌発売を楽しみにしていました。表紙写真はスタート風景だったのですが、第1組のスタートは撮影テストだったのか使われたのは後のスタートのものでした。中表紙の写真には私が写っていたのですがピントは隣を走る女性に合っていました。そりゃあ、そうですね。

船では遠くに見える目標物とコンパス（方位磁石）で自分の位置を求めます。日頃からやっているのだから富士山など遠くの風景を見れば自分の位置はすぐに分かると思っていたのですが甘かったです。当日の天候はあまり良くなくて、富士山はもちろん風景なんてものはまったく見えませんでした。当時のルールでは競技地図にはゴール位置は記載されていなくて、TX5を探索してからその近くに設けられているゴールに行くというものでしたが、スタートしてすぐに自分の位置が分からなくなってしまいTX5を見つけるのがやっとでした。

これに懲りずに次は関西地方大会に出場しました。全国大会で得た教訓の「地図上の自分の位置を確認する」をその日の目標として競技地図の余白に書き込みました。これにはOMクラス（当時のクラス分けは現在と大きく異なっている）で4位入賞しました。その後も参加を続けて経験を積むことで多くのメダルをいただきましたが、私にはこの時の4位の賞状が一番の宝物です。

「1年に5つの大会に出場しよう」と目標を定めたのですが、開催数を知らないまま手当たり次第に参加していったら10を越えてしまいました。北海道での大会に出場して、そのまま翌週の岩手県での大会に出場したこともあります。地方大会に出場の最初のAJD（10コールエリア）達成者だと思っています。今では遠くの大会への出場者は珍しくありませんが私がはしりです。当時のJARL和歌山県支部長に「植木さんは道場破りだ」と称されましたがこれも私にとっての誇りです。

【Q3】他のアマチュア無線の分野は楽しんでいるのですか？

【A3】144MHz帯と430MHz帯SSBでコンテストに参加していました。地上高100mの煙突頂上で運用したこともありますが苦勞の割には効果は感じられませんでした。

次いで本誌移動運用セミナーのペディションアワードの達成者がいなかった県部門に挑戦しました。全県で移動運用するわけですが過半数が大会出場での移動によるものです。僅かの差でNo.2の獲得でした。

そのNo.1獲得者から山岳移動通信ランキング（山ラン）の案内が届き、これにものめり込むことになりました。大会参加の移動での登山が多く、標高差400m程度の山でしたら大会が終わったらその日のうちに登るということも行いました。特に力を入れたのが超低山で、低山ベスト100のトップになったこともあります。登山ガイドブックや登山地図の無い山ですの大変です。神社の裏など登山道のありそうな場所を探り、山頂の表示もありませんので地形図と実際の地形を見比べて特定。ARDFでの経験が役立ちましたし、逆にARDFの地図読みトレーニングにもなりました。

アマチュア無線を始める前はマラソンと登山は一生することはないだろうと思っていましたが、ARDFという長距離走行競技と山岳移動で登山を行うこととなりました。

【Q4】選手としてではなくサポーターとして活動することになったきっかけは？

【A4】 1990年チェコスロバキア世界大会と2004年チェコ世界大会に選手として出場しました。2004年大会では、ベテラン日本選手の一人が競技前夜なので自身の競技準備をしなければならないはずだろうに日本選手全員の空港送り便手配の交渉を大会担当者で行っているのを見て選手には競技に集中する環境を与えなければならないと痛感しました。

サポート担当団員の必要性を感じてサポーターとなることを決意しました。2006年ブルガリア世界大会から志願してサポーターとして日本選手団に加わっていますが、2005年新潟Reg.3大会でも写真撮影と外国選手の買い物に付き合いつつ、日本選手のミーティングに同席していましたのでサポーター活動は新潟から始まっていたのかもしれません。

【Q5】本誌連載スタートのきっかけは？

【A5】 パソコンを買い換えてからパソコン通信ニフティ会議室に大会参加レポートを投稿するようになりました。それがJH6UST 今村洋治・JG6RLR 秀子夫妻による編集発行のARDFネットワーク誌に転載され、やがて直接寄稿することになりましたので当時の主要なARDFerには私のレポートを読んでいただいていたと思います。

多くのARDFerがCQ ham radio誌の編集長などと会う都度「ARDFコーナー連載開始」を要望してきました。特に長野ARDFクラブ会長JE0GTT 折井匡さんは、1998年JARL長野総会の広報委員長として本誌と関わりを持ち、1999山梨全日本大会、2005石川全日本大会でも本誌との対応していました。ハムフェアも含めて編集長に「ARDFコーナーを」と常に要望して来られました。2006静岡全日本大会で前向きな話となって、「執筆者は誰に？」で折井さんが私を推薦しました。大会会場でお話を伺いましたが即答で承諾して2007年からの連載が決まりました。

【Q6】連載継続のために行っていること、心がけていることはありますか？

【A6】 大会などイベントにはできる限り取材に行っています。全ての大会を取材することは困難ですので、行けない際はスタッフや選手にレポートをお願いしています。北海道や鹿児島まで取材に行ったことがあります。去年はコロナ禍で春に開催を見送っていた大会が秋に開催されました。例年が秋開催の大会と合わさって、ほぼ毎週どこかで大会が開催されていました。10月下旬から12月上旬までずっと取材旅行を行っていて、11月は長野県から静岡県に向かう間に5日間だけ洗濯とごみ処理のために自宅で過ごしました。なお、明日宮城県多賀城市で審判員講習会が開催されますので取材のためにこの後宮城県へ向かいます。

趣味での執筆ですが商業誌ですので原稿を落とすことだけは避けなければと緊張します。

ARDF ネットワーク誌（隔月発行）の時は発行日が近付くと「今号も原稿お願いしま〜す」と FAX が届くのですが、返事は「すみません、書けませんでした」とのこともありました。

急病で 5 週間入院した際は、病院のベットから携帯電話で協力してくれる選手にリポートを依頼して、少し回復して外出が許可されたら自宅へパソコンを取りに戻りました。ARDFer の協力で「筆者急病により休載します」を避けられました。

ほとんどの大会が春と秋に開催されますので、2 月号から 5 月号までの記事テーマに悩みます。11 月号ぐらいから今後の記事テーマを考えて調整していき、「1 年間の総括」や「今年の展望」などのニュアンスを加えて古いイベントの記事にしているととられないように苦労しています。

取材をしながらでは競技に集中できないし、写真も撮影しなければならないので競技は引退状態です。2006 年から全国的な ARDFer のメーリングリストの世話もするようになりました。2010 年には JARL の ARDF 委員を拝命しました。裏方に回る時期だったのかもしれませんが、執筆やサポーター活動を「他人（ひと）から与えられた恵みを、次の他人（ひと）に手渡すことでお返しする」そんな気持ちでやっています。

掲載開始から 10 年ほど経って久しぶりに大会に出場することにしました。いきなり大会で走るわけにはいけないので、ジョギングで身体を慣らしていたのですが靴が崩壊して靴底が剥がれてしまいました。そうです、靴も 10 年経過していました。

入稿を終えると担当者から「早いお原稿ありがとうございます」と返信。お世辞でなかったとしたら他の執筆者はどれだけ遅いの？ と思いながらも、ぐったりと抜け殻状態、燃え尽き症候群状態で過ごします。月が替わると「そろそろか…」と考えながらも、お尻に火が付かないとできないタイプですので締切が迫らないと何も書けません。「締切がクリエイターの創作の原動力の一つ」と自己弁護しています。

【Q7】ARDF の魅力とは？

【A7】森林公園などで大会が開催されますので一般ハイカーから「何をされているのですか？」との質問を受けることがあります。競技中の選手に代わって「アマチュア無線を使った宝探しです」と答えています。

多くの ARDFer が「TX を発見した時の達成感が凄い」などと魅力を語りますが、これは実際に体験していただくしかありません。まずは近所で開催される大会に参加していただきたいです。大会会場ではハード、ソフト両方の探査技術の情報交換が行われプライベートな練習会に誘われることもあります。

ハムフェアに有志により出展しています。現在は関東地域だけですがブースを訪れて興味を示された方に公園などで体験会を企画して案内しています。

ARDF を始めるに当たって最大のハードルは受信機の入手でしょうか。最初は大会スタッフに相談すれば所有しているものを貸してもらえそうです。競技を続けたい、続けられると思われたら自分に合った受信機を入手されればいかがでしょうか。なお、貸し出しは

商売でやっていませんので配慮はいただきたいです。

大会や練習会の情報は ARDFer メーリングリストで情報共有されていますので参加されてはいかがでしょうか。 <http://www.ardf.jp> または「ARDF 日本」で検索すると出てきます。

ある時、ラグチューで私自身を「身体は弱いし、気は弱いし」と語ったら、交信相手に「身体が弱いかどうかは会ったことがないので判らないが、コンテストをやっている者が気が弱いはずはない」と返されました。私は子供の頃から周囲におとなしく気が弱いと思われていたことでしょうし、自分でも思っていたはずですが、それがアマチュア無線を行うことで、コンテスト、アワード、山ランそして ARDF と、実は競争心が強く負けず嫌いだということを知られました。ARDF が向いているのはこんな方だと思います。また、初出場でいきなり好成績というのは少なく、散々な目に遭うことがほとんどでしょう。懲りるということを知らない、そんな方も向いています。

あと、ARDFer はコース設定が難しければ難しいほど、苦しければ苦しいほど喜びますので「ARDFer はマゾだ」と私は言っています。冗談ですよ～。

【Q8】取材や競技会で印象に残るエピソードがあればお話しただけませんか。

【A8】取材という立場で多くの大会を見てきて感じるのは ARDF は探査数と所要時間を競うだけでなく色々な楽しみ方があって、しかも永く楽しめるということです。

世界大会では超高齢の選手が杖をつきながら歩きながらゴールをする際は国を超えて拍手など大きな声援が贈られます。日本でも脚が弱って走れなくなってしまうても杖をついて出場されている方、世界大会に出場経験があるけれど今は走れなくなったが大会にはやってきて応援をし時には受付けなど運営を手伝われる方もおられます。自作受信機の調整をのんびりとやりながら探査を楽しむ方、競技中に走る姿は誰も見たことがないのに安定して上位の成績の方など競技スタイルは様々です。

運営も突発のトラブルに手際よく迅速な対応をとる大会もあれば、これはもうちょっと考えた方がよいのではと思う大会と色々です。大会を運営することも「金銭上の利益のためではなく、もっぱら無線技術に対する個人的な興味により行う、自己訓練、通信、技術的研究」とのアマチュア無線になっていると感じます。

世界大会はチームとしての戦いでもあり、中には国を背負っているチームもあるでしょう。チームリーダー会議の議論は自然と白熱します。東欧のメンバーは熱が上がってくるとそれまでの英語からロシア語に代えての議論になってしまうこともあります。「熊が出るかもしれない」とのスタッフからの説明に、「Bear(熊)でなく Beer(ビール)は出ないのか？」と返してなごむこともあります。

世界大会ですが、ゴール付近で競技中の選手を撮影して、ゼッケン番号でその選手の成績を確認したことがあります。すると走る姿が美しく撮れている選手は成績も上位でした。ARDF でもトップアスリートの肉体は鍛え上げられているのですね。

(ARDF と日本の行く末を案じ)

国際大会にサポーターとして選手団に加わってきましたが年齢の面からサポーターがサポートされることがないうちに辞め時が近付いているのではと思っています。年金暮らしになりましたので費用確保の面もあります。

少子高齢化の状況下で ARDF だけでなくアマチュア無線そして全ての趣味などでちゃんと次の世代に引き継げるのかと思っています。

そして、最近強く感じるのが自由付きの平和がいつまで続くのかということです。ARDF に限らずあらゆる趣味は自由付きの平和の下でしか楽しめません。文化や芸術の発展もあり得ません。

初めて参加した世界大会は 1990 年チェコスロバキア世界大会、東西ドイツ統一 2 週間前でした。自由が満ちた世界平和の到来を信じました。次の 2004 年チェコ世界大会はチェコが EU に加盟した年でした。豊かな発展を信じました。そして、今年のチェコ世界大会はウクライナ戦争の真最中です。秩序は破られ混沌の世界へと向かっていて信じられるものはなくなりました。ウクライナの人々はある日突然に日常が奪われました。この戦争で判ったことはどこの国も核保有国とは直接の対戦を避けるということ。

日本は核保有国に取り囲まれています。日本周辺もきな臭くなってきました。日本が核保有国に攻められたらどこの国も戦ってはくれません。ウクライナは 1 年以上持ちこたえています。日本にはそんな力がありそうではありません。備えはどうすればよいのか、いやそれをどれだけの人が考えているのだろうか。杞憂が杞憂でなくなった時代に ARDF を心から楽しむ大前提を危ぶんでいます。

(以上) 2023 年 6 月 18 日 CQ ham radio Web サイトダウンロードコーナー 掲載